
S H E L O S T W A Y

ミロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S H E L O S T W A Y

【Nコード】

N O 9 6 6 H

【作者名】

ミロ

【あらすじ】

アリスが目を覚ました時、そこは暗い暗い森だった。そして謎の男ミロと出会う。アリスに対しても優しく接するミロ。アリスは疑問を抱く。そしてここから少し奇妙で不思議なアリスの旅が始まった……

くプロローグく（前書き）

この作品は初めて書いたものなので、正直な所
理解してもらえるか不安な面もあります。

ありのまま、自由に書いたものなので是非読んでみて
下さい！アドバイスヨロシクお願いします！

くプロローグく

真実って時に残酷・・・

君を傷つけないやいけない時なんだ・・・

けど僕は・・・君を放さない・・・絶対に・・・

「ねえ・・・知ってる？」

そして・・・不気味な笑みを浮かべ・・・

ゆっくりと口を開けた・・・

Story 1 暗い道

暗闇から見える小さな光。

木々達が私に語りかける。

アリス・・・呼んでる・・・ミロが・・・聞くんだ・・・声を・・・

その時、誰かが私を呼んだ。

「アリス！アリス！アリスったら！」

「ん・・・ん・・・」私は目をこすりゆつくりと上を見る。

「アリス！こんな所に居たら駄目じゃないか！！此処は危険だ！」

良く分からない・・・目の前に居たのは大きな帽子をかぶり、

きちんとしたネクタイに髪は緑色。きちつとしたスーツを着た

優しいそうだけど怪しい男の人が居た・・・それより・・・

私どうしてこんな所に居るんだろう？？声もかすれてただ、怯える

事しか出来ない・・・

「あ・・・あの・・・わ・・・私・・・」

「怯える必要なんか無いよ？アリス！僕は君の味方だから！」

その男はゆつくりと私を包む・・・なぜだろう・・・私の中の恐怖とい

うものが

スウーッと抜けていくような感じがした。

「私・・・お姉さんと紅茶を飲んでて・・・眠くなって築いたら・・・」

「今はそんな事言ってる暇は無い！女王の兵士が来る前に逃げなさい！」

「い！」

女王？頭の中はもうパニック状態・・・一人は嫌・・・私はこの今が

夢であって欲しいと心から祈った。

「一人何か無理に決まってる・・・これは・・・夢じゃないの？・・・」

輝く青いしずくが男の手に落ちた。すると・・・

「ドサツ！」「キャツ！」

その男は私を強く抱きしめた。

「ゴメンよ・・・アリス・・・僕は一緒に行く事が出来ないんだ・・・

今から僕の言う事を良く聞いて・・・？」

その男は暖かい声で私に言った。

「言う事？怖くない？」

「少し一人で歩くだけさ。怖く無いよ^^いくよ？」

まずこの道をまっすぐ行くと、小さな穴があるんだ！

その穴に思いっきり飛び込むんだ！アリスには少し怖いかもしれないけど・・・

大丈夫！アリスは強いさ！」

「どうしてそんなに優しくしてくれるの？」

「アリスだからだよ。」なぜか会った記憶が無い人なのに・・・

とっても懐かしい・・・すると・・・

「せっかく会えたのに・・・導く事しか出来ないなんて・・・ゴメン・・・アリス・・・」

「私に会った事があるの？」「ガサツ！何者だ！」女王の兵士が私達に築いてしまったみたい。

「アリス！分かったね？走るんだ！」

「名前は？せめて名前だけでも！」

「僕はミロ！アリス！僕はアリスの傍に居れないけど、アリスの心の中にいつでも傍に居るよ

！アリスの中の小さな光。それが僕なんだ・・・アリス・・・

今は辛いかもしれないけどきつと全て元通りになるから！

またどこかで必ず会おう・・・」

そしてミロは暗闇へ消えていった・・・「あ！」

・・・今は行かなきゃ・・・良く分かんないけど・・・ミロが言っていたあの穴に・・・

そこに私の道があるなら・・・進むしかない・・・それが私の生きる道なのだから・・・

ミロと別れ、私は穴へ向かった。走って走って兵士が追って来ない

位走った・

辺りは真っ暗で押しつぶされそうだった。すると道のすみの方に小さな穴があった。

Story2 不思議

「ここかな?..」

そこは、底なしの穴のようにも見える。

「ここに落ちなきゃいけないの...」

そして私はそつと穴のを覗きこんだ。その時私の後ろで何かが草を揺らす。

「誰?!」すると、そこから出てきたのはいかにも怪しい

赤いスーツを来た小さなウサギだった。

「何だ...ウサギかぁ...」そして私はウサギの頭をなでた。普通に考えると

スーツ来たウサギ何かいるはずも無いのにつて思うけど、今は

そんなので驚いてる所じゃない。すると何処からか小さな小さな声が聞こえた。

「アリス...一緒に穴に飛び込もう...」「...えッ?!」

ここには私とウサギしか...ウサギ!私はゆつくりとウサギの顔を覗き込む。

「君じゃ...無いよね?...」「アリス!一緒に穴に飛び込もう!」「キャッ!」

私がウサギを放した瞬間辺りがほんの数秒だけ光の世界を映し出した。

「今の...何?...」

腰がひけて立つ事もままならない。すると...

「アリス?飛び込もう...一緒に...」

私はゆつくりと顔をあげた。するとそこには、赤いスーツを着た白髪で

めがねをかけた男が...立っていた。その男の頭には真っ白で綺麗な長い耳が生えていた。

「え...ウ...ウサギが...」

「どうしてそんなに驚くんだい？さあ、飛び込もう！」

「ち・ちよつと待ってよ！！あたしは・・・」「もー！」

するとウサギは・・・私の体を軽々と持ち上げて穴の前に歩みよった。

「お・重いつて！や・やめてよ！」

「そんなに怒らないで下さい。それじゃ・・・行きますよ？」

するとウサギは私を抱え、穴へ飛び込んだ。その瞬間違和感が私を襲った。

「う・う・う・」 「大丈夫ですか？アリス。」

ウサギは私に抵抗が無いように私を包んだ・・・

「よし！もう大丈夫！」 その時「うわぁ！何これ！」

空間が無重力になった時みたいな感覚・・・

「ど・どうなってるの？」

「ここは不思議の国への入り口にすぎないのです・・・これからもつと不思議な事がおこります・・・」

言い方が何か怖い・・・そして私の足が地面にゆっくりとついた。

目の前には妙な空間が広がった。なにかもが逆さま・・・

「不思議だわ・・・」

私はじつとウサギを見つめた。

「どうしたんです？」「あなた・・・何が目的？私をどうする気？・・・」

「僕はアリスの案内人みたいなものですよ。」

「それなら・・・あなたミロつて人知ってる？」 その時ウサギの顔が変わったような気がした。

「・・・」 「・・・どうしたの？・・・」

「ドンツ！」 「キャツ！」 私は壁に押し付けられた。

「な・なんなの・・・」

殺される！とは思えない・・・

「アリス・・・君は幻を見ているのです・・・その幻は、けして良いも

のではありません・

だまされてはいけませんよ？」

何か強い気がウサギから伝わってきた・・・

そんな・・・幻な訳・・・

「あなた・・・何か隠してるの？・・・」

何故だろう・・・そんな気がする・・・何の根拠も無いけど、ただ頭の中にそれが残った。

私はじつとウサギを見つめる。きっと・・・何か・・・

「隠してなんかいません^^ただ僕は真実を言っただけです^^ミ口はとっても悪い人なんです・・・

きっといつか貴方を傷つける・・・その時は私が・・・さっ！こんな所でゆっくりしてる暇はありませんよ？

さあ、この扉を開けて下さい。」

「扉・・・」

「これが、貴方の運命です・・・」

「運命？・・・」

ふと見た時、目の前には、小さな小さな扉があった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0966h/>

S H E L O S T W A Y

2010年10月28日08時38分発行